

取扱はれてゐる社會と神社との事に關してである。現今の社會組織は頗る複雑で一樣の形態を備へてゐないのは申すまでもないが、その内容に於いても多様である。或は宗教信仰を持つてゐるものもあり、然らざるものも多多存するであらう。又たとへ宗教信仰の把持者であるとするも必ずしもそれが同一の宗教の信仰者ではない。のみならず、宗教信者たらずとも、或る種の信仰を有つてゐる者も少くない。扱これ等の人人をその内容とする社會の中に介在する神社としては、決して無關心たり得ない筈である。たとへば社會の一員たる個人が神社の信仰者であるとする。それが社會人たる以上、社會の動きに超然たる能はざるは論を俟たぬのである。されば社會の動向が神社に對しても、直接間接に尠からぬ影響を齎すものと考へなければならぬのである。この意味に於いて、神社は絶えず社會から或る種の牽制を受けるものであることを知るべきである。去りながら、我れ等神社人は、安易にこれを甘受するを以つて足れりとなすべきでない。寧ろ神社側より社會に向つて、常に種極的な歩みを繼續すべきであると信ずる。

情々從來の神社の動向を窺ふに、古代に於いては兎も角、佛教傳來以來の神社は常に佛教に先蹤を譲つて來たのである。この間壹千三百有餘年に及び、佛教の傳播は佛教者の手によつて、或は當時の爲政者の手を通じて全國津津浦浦に浸透した。それにも拘らず、尙ほ神社は抜くべからざる潜勢力を有して來たのである。然らばこの潜勢力は如何なる處に存したのであらうか。それは爲政者の政治力にあらず、領主にあらず、智識層にあらず、國民の眞摯な信仰の力が持ち續けた所に存したのであると思ふ。元來、神社は極めて消極的であつたにも拘らず、以上の如き結果を齎したのである。我れ等は如上の經緯を注目することを怠つてはならぬが、去りとて、現下の如き各種の思想が相交錯して、その歸趨は殆んど端倪を許さない狀勢を醸してゐる秋に際して、従前の如き態度を持続するに於いては、果して如何なる結果を將來するであらうか。必ずや従前のそれとは全く異つた状態を呈するは、火を略るよりも明かである。ここに於いて、我れ等の考慮を必要とするのは、前述の國民の間に潜在する信仰に著目して、それを覺醒せしめて、旺盛なる信仰心の復活を

導引する一方、絶えず社會の動向に深く注目して、常に社會の指導者たり、先蹤者たるの地位に神社を置くことが、最も必要であると信ずる。然らざれば宗教上の敗残者たるの苦汁を嘗めなければならぬ結果に陥るのである。

この機會に於いて、我が國に傳來して以來の佛教が、神社に對して採つた態度を綿密に研究して、それを了解すべきである。即ち、佛教の傳來以後、數百年の後は、漸く神佛習合説が提唱され、續いて本地垂迹説が起つて、ここに神佛は完全に握手するに至つた。尤もこの間、神と佛との地位は、必ずしも同一でなかつた。最初は佛本神從であつたのが、後には神本佛從となつたこともあつたとはいへ、兎も角、國家も社會も同様に、これを認容してゐたのである。現今の神社が佛教に對して從來の如き状態を繰り返すか、或は基督教に對しても同様の形を採るかどうかは固より豫斷を許さぬが、たとへかかる事態が発生するとしても、従前の神佛關係の如き安易な状態が、繰り返されるとは考へられないのである。要は、國家若しくは社會對宗教の關係にかかるものと思はなければならぬのである。かくある以上、我

れ等は國民たり、社會人たる人人の宗教情操を洞察して、それを善導誘掖して、常に社會情勢を有利に展開せしむべきである。しかしてこれが方策は、社會の進歩に常に先立つ覺悟を以つて、これに臨むより外ないのであらう。かく觀じ來るとき、宗教は單なる個人の安心立命を得しめるもの、個人救濟を目的とするものであるとはいへ、亦以つて對社會的交渉を輕視するが如き態度に出ることは、神社人として取るべからざる處であらう。去りながら、これが舊來の地域をその基礎とする氏子制度とは、全く別個の新しき傾向として取扱はれなければならぬことを、深く了解すべきであらう。

## 第十一章 神社神道の宣布と求道

神社が宗教として發足して以來、未だ兩三年の年子を閱するのみである。尤も神社は本質的に宗教的素質を多分に具へてゐたが、國家神道として發達を遂げて以來その宗教的要素は殆んど顧みられなくなつた爲め、神社は宗教にあらずとする國家神道時代の論旨をその儘踏襲してゐる者も存するが、神社が宗教たることは、その發生の動機から見ても明かである。宗教には教祖や教義や教典が存しなければならぬと論ずる者も存するが、必ずしもそうとは限らないのである。尤も教義や教典はその布教上必要であるのは申すまでもないが、よしやこれがなくとも、布教の手段は如何様にも執られるのであり、又、神社神道を説く人人が、各自の宗教感覺に訴へて、第三者に對する場合、その行はれる言説が集積すれば、必ずや近き將來に於いて、何等かの形を以つて、教義とも教典ともいふべき姿を備へたものの生れることは期して待つべきであらう。

それは兎も角、今や神社人は神社神道の宣布の重任を負うてゐるのである。然らば如何にしてこれを宣布すべきかが、重大なる問題として取り上げられなければならぬのである。教義教典を有たぬ神社人は、先づ神と自己との靈の繋がりや氏子崇教者中にも求道者にも悉知せしめることを第一の要諦となすべきであるが、あらゆる社會生活に對する根本理念となるべき宗教的諸要素を各自の信仰する神を中心に説示することが要請されるべきであらう。殊に社會の秩序は亂れ、道義は地を攘ひ、人間としての自覺を失ひつつある現下の情勢に處して、これ等の人人に人間としての自覺を蘇らせ、道義を追求して社會人としての地位を把握せしめ、社會秩序の回復を各自の責任に於いて遂行せしめるやう、宗教的信仰に徹せしめることを企圖しなければならぬ。中にも將來の國家社會を荷ふべき青少年の指導には、最大の努力を拂ふべきであらう。如上の目的を達成せんには、先づ身を以つて範を示すことは言はずもがな、或は説教所の設置も考慮されるのであり、又は個人との對談も必要

であらう。尙ほ孤兒・鰥寡孤獨の老人、若しくは社會の敗殘者等に、温き手を伸べて、これが救濟の道を講ずるもよし、不具・癡疾者を救助することも忘るべからざる事柄であらう。又求道者に對しては、彼れ等の宗教的慾求を満足せしむるやう、懇切なる指導を怠つてはならぬのである。要は、これ等の求道者は勿論、その他の人人に對しても、積極的に指導して、彼等をして安心立命を得しめ、社會人としての常道を踏ましめ、以つて世界の平和に寄與すべき覺悟を持せしめることこそ、神社人の責務であると信ずるのである。

## 神道概論（終）

## 附 録

## 神道説の歩み

佛教はその傳來以來、孜孜としてこれが傳播に勉めたが、外來の宗教だけに、著著その効果を收めるといふ譯には行かなかつた。去りながら、時代の降下と共に、漸くにして我が國の神祇は佛教の擁護者たるの地位にたたせられるとの觀念を生ましめるに至つたのである。その最初の表れとして擧ぐべきは、聖武天皇の大佛鑄造に際して、宇佐の八幡神がこれを幫助されたといふ傳説であらう。『續日本紀』第十七、天平勝寶元年十二月廿七日の條に載する、聖武天皇が大佛鑄造の功を竣へ給うて、宇佐の八幡神に報賽の爲め奉られた宣命に、「……豊前國宇佐郡爾坐廣幡乃八幡大神爾申賜閉止勅久、神我天神地祇乎率伊左奈比天、必成奉无、事立不有、銅湯乎水正成、我身遠草木土爾交天、障事無久奈佐牟止勅賜奈我良成奴禮波、歡美貴美奈毛念食須、

然猶止事不<sub>レ</sub>得爲天、恐家禮登毛御冠獻事乎恐美恐美母申賜久止申」とある。この宣命の文意より察するならば、天皇の大佛鑄造に神助を垂れ給うたことを報謝されたところあるけれども、これは間接に佛教を擁護された事實を言ひ表されてゐるのであると見なければならぬ。その後、稱徳天皇は天平神護元年十一月廿三日（庚辰）の大嘗會、豊明の日の詔命に「……神等平方三寶余利離天不<sub>レ</sub>觸物會止奈毛、人乃念天在、然經乎見末都禮方、佛乃御法乎護末都利尊末都流方、諸乃神多知仁伊末志家利、故是以出家人毛、白衣毛相雜天供奉仁、豈障事波不<sub>レ</sub>在止念天奈毛、本忌之可如久方不<sub>レ</sub>忌之天、此乃大嘗方聞行止宣御命乎、諸聞食止宣」と宣らせてゐる。これを以つて見れば、明かに神は佛教を擁護し給ふといふことを認證されてゐるといひ得るのである。この思想は時代の降下と共に漸く濃厚となり、或は經文を誦することを悦ばせられるとか、或は堂塔の建立を受けさせられるとかの事が考へられ、有名な神社に神宮寺を建立し、度を置くことが行はれ、更に進んでは、神に菩薩號を奉るやうになり、遂には神に權現號を奉ることとなつたのである。即ち佛は衆生濟度の爲めに、權りに神となつ

て姿を現し給ふのであるといふ思想にまで展開した。これが所謂本地垂跡説の歩み出してあつた。かくて、平安時代の後期から鎌倉時代の初期にかけて、全國の有數な神社の祭神に、それぞれの本地佛を配して、本地垂跡説は一應結實したのである。この説は、或は傳教又は空海が唱道したといふも、實は何れの人に、その起原を係け得ることが出来るのか明かでない。只だこの思想は、佛教自體が已に印度に於いて包懷したものであつて、支那に於いてもそれを實現したので、我が國に於いてもこれを具現せしめたのであるといふのが眞に近い説でなからうか。

佛教に亞いで我が神道界に大なる影響をなしたものは、支那大陸より輸入された道教・儒教・陰陽道・五行・讖緯説等である。中にも陰陽道や五行讖緯説などは、我が神道とその内容の近似性の強かつただけに、早く神道の中に融け込んで、その内容を充實せしめる役目を荷うたに過ぎないものとなり終つたのであるが、これが應て後世の儒家神道を形成する大なる基盤となつたのである。

本地垂跡説に亞いで起つたものに、縁起神道なるものがある。縁起神道とは、各

神社成立の由來を解いたものであるが、多くの場合、それには佛教思想がその基礎となり、背景となつて、神社創立の由來と、祭神の性格神徳などが物語られてゐるのである。これは早く今昔物語・古今著聞集・十訓抄等の諸書に採録せられてゐるが、しかもその源流とも思はれるのは、日本靈異記であり、それが完成されたのは元亨釋書であり、安居院の神道集等であらう。尤もこの間、各神社にそれぞれの縁起が作成されて、今尚ほ保存されてゐるものが多々存する。

以上の他、佛家の手に成つたと思はれるものに、山王一實神道が存する。これは傳教大師の唱道になるといふも、その誤傳なるは論を俟たぬ。只だ、この神道説が天台宗殊には比叡山の僧侶の手になつたことだけは慥かであらう。しかもその完成は、戰國時代頃でなからうか。尤も謙倉時代の中期頃には、或る程度までの内容の充實を示してゐたと思はれるのである。この説は比叡山王（現今の滋賀縣坂本の日吉神社）を中心とした説で、その山王といふは、豎の三點、横の一點（山）、横の三點、豎の一點（王）をその中軸とするもので、「表三諦即一也、山字豎三畫者空假中

也、横一畫是即一也、王字横三畫者三諦也、豎一畫又一也、二字三畫、而有二一貫之象、故我立爲號也。」と説いてゐる如く、これを以つて、山王明神の名號の依つて來る處を説明し、山王を以つて天台宗の中心と説いたものである。しかして山王の本地を釋迦となしてゐる所に、天台宗の説かんとする神道説の内容が、如何なるものであるかを推知することが出来るのである。

天台宗の系統を引くものに、日蓮宗の神道がある。これは日蓮の唱道した『諫行八幡鈔』に根基を置くので、法華經を以つて佛教の眞諦となし、日本の三千餘座の神祇は、悉く法華經守護の任を持つてゐると説くのである。この説の原初には、三十番神の思想が存したと考へられるが、後世法華神道に於いて三十番神を強調したのは、日蓮の死後間のない時代であつたのであらう。

次に注意すべきは兩部神道である。これは眞言密教の金剛界・胎藏界兩界の曼荼羅を以つて、伊勢の内外兩宮を説明せんとしたものである。これもその主唱者を明かにしない。その一の表れともいふべきものに、三輪流神道がある。これは『三輪

大明神縁起』にその主旨がよく窺はれるのであるが、これは大神の神と、天照大御神とを同一神と観じて立てた説のやうであつてこの説の判然と見られるのは、前記の『三輪大明神縁起』である。尤も、この縁起は文保二年の作といはれるので、後説しようとする伊勢神道の唱道されたよりも後である。然るに、伊勢神道は兩部神道の一變形とも考へられるので、兩部神道は已でに鎌倉時代の中期頃には、一應完成の域にまで進んでゐたのではなからうか。

以上は大體、我が神道説の先驅をなした諸説であるが。これ等は悉く佛家の手になるものである。神道家のこれに手を染めたのは、時代的にこれより以後と見なければならぬのである。中にも伊勢の外宮の神職、度會氏の唱道した神道説は、その鎌倉時代に於ける尤なるものであつた。この神道説は、前記の眞言兩部神道の亞流とも見るべきもので、所謂神道五部書を中心とし、金胎兩部の構成をその骨子としこれに道教の説を加味したものである。この神道説は當時未曾有の國難として知られた蒙古の襲來の頃に唱道されたのであるが、この役の勃發前後より、國民思想に

少からざる變化を來し、我が國の眞姿を把握して、日本國民としての自覺を深めよとの努力がなされたのである。その機會に於いて、從來唱道された神道説が、常に佛家の手によつたのを遺憾となし、伊勢度會氏が奮起して樹てた神道説が、即ち伊勢神道であつた。尤も、度會氏は世世外宮の神官であつて、常に内宮の神官との間に軋轢を生じてゐた。その重なる原因は、外宮が内宮よりも一步を輸せざるべからざる状態にあつたので、これを快しとしなかつた度會氏一家は、外宮をして内宮と同様のものたらしめようとの念が盛んであつた。ここに於いて企てられたのが、伊勢神道の唱道であつたのである。その極、その説く處は二宮一光説であつたが、稍もすれば外宮を内宮の上に置かんとする意圖をほのめかしてゐたのである。かくの如き原因に支配された爲め、彼れ等の手になつた多くの著述は、悉くそれを表示するものであつた。しかしてそれを大成したのが度會家行で、彼れには有名な類聚神祇本源なる著述があつた。これ等の諸書を通じて感ずる處は、その所説の大部分が佛敎によつたものであること、その點に尠からざる失望を感ずるのであるが、こ

の神道説が大きく取扱はれて來たのは、その唱道者が神職であつたといふことに存するのであらうと考へる。尙ほ度會家行がかくの如き説を祖述したのは、後の吉田家、當時の卜部氏との親交が大なる影響をなしてゐるのであつて、中には後の卜部神道とも一脈通ずる處があり、山王一實神道とも全く絶縁されてゐなかつたことは、深く注意すべきであらう。尤も伊勢神道は江戸時代の神道家から、手痛い非難を受けてゐるとはいへ、彼れ等の解明になる伊勢の兩宮に關する諸説には、尙ほ首肯すべき或る者の存することは見遁してはならぬのである。尙ほ家行の所説には北畠親房の力が、與つて大なるものであつたことも忘るべからざる所であり、僧慈遍の存在も伊勢神道には必要なものであつたのであらう。

尙ほ伊勢神道の北畠親房に對應する者として、忌部正通の神道説が存した。彼れの著す神代口訣にその説を窺ふことを得るが、未だ神道説として一流派として、認められるまでには至らなかつたのである。去りながら、これが纏て江戸時代に起るべき忌部神道の基盤をなすものである。

伊勢神道と多少時代の隔りが存して、神職の間に起つた神道がある。それは卜部神道であつて、吉田家に於いて主唱したものである。その代表的人物を吉田兼俱とする。兼俱は神祇大副兼名の子で、神祇大副侍從となつた。彼れの主唱した神道説は極めて宗教的色彩の濃厚なもので、この點に於いて伊勢神道と、その趣を異にしてゐる。彼の主唱に成つた神道は、これを唯一神道と稱へてゐるが、その教義内容はこれ亦伊勢神道と同様、佛教との關聯を脱し得ないもので、伊勢神道が眞言宗にその根基を置いたのに對して、天台密教に依存したのである。彼れは自己の主唱する神道は、元本宗源神道であるといふ。ここに元本宗源神道とは神道を三に區分し一を本迹縁起神道（社例縁起神道）、他を兩部習合神道と唱へ、更に元本宗源神道を加へてゐる。この元本宗源神道が吉田家の神道であつて、これを顯靈教と隱幽教との二に分ち、顯靈教の道場を齋庭といひ、ここでは専ら顯教の祭祀を修し、又、これを外場といふ。隱幽教の道場は、これを内場と稱へ、そこで彼の所謂十八神道の加持を行つたのである。更に彼れは齋場を設けて、そこに伊勢二宮を初め、天神地



祇の諸神を悉く齋ひ奉つたのである。のみならず、自ら神祇管領長上と稱して、神祇伯と紛らはしきものとなし、全國の神職を支配することに成功したのである。かくて唯一神道は、全國の神社神道に深く咬ひ込んだが、これ亦江戸時代に至つて非難の的となつたのである。とはいふものの、兎も角、宗教神道として一應の成果を収めたのである。尙ほ彼れが室町時代にその萌芽を出した根葉華實論を主張して、神主佛從の説即ち反本地垂迹説を強調したことは注目に價する。

以上述ぶる所の山王一實神道・法華神道・兩部神道・縁起神道・伊勢神道・唯一神道等は、悉く戰國時代の末期頃には、一應各その形態を備へて、江戸時代に臨んだのである。かくて江戸時代に於いて、國學の復興と、幕府の漢學獎勵とによつて、また各種の神道説が主唱されると共に、前代に於ける神道説に對して、痛烈なる批判が加へられるに至つたのである。

江戸時代の初期は古學復興の時期に當り、古學の研究の隆盛となるに従つて、神道説も頗る活潑に展開したのである。

前代に發生して相當の發展を遂げたものの中に、第一に擧ぐべきは吉田神道即ち唯一神道である。吉田神道は先づ家康に講ぜられたが、當時天台宗の南光坊天海との勢力争ひの結果、幕府に深く入ることはなかつた。去りながら、地方の神職に對しては、その支配權を確保して、從來の神祇伯白川家と勢力を争ひ、遂に白川家の右に出づるまでに進展したのである。しかして、その神道説は吉川惟足に傳へられたのであるが、吉川惟足は更に吉川流神道を創始したのである。されば惟足の神道説はその原流を吉田神道に需めてゐるが、更にこれに五行説と宋儒の理氣説等を加味したものである。

鎌倉時代に度會家行によつて大成された伊勢神道は、當代に入つて、度會延佳によつて再び擡頭した。從來の伊勢神道は、主として兩部神道と道教等にその根基を置いたのであるが、この神道説に佛教の經義を執り入れることの不可なるを悟つてこれを廢棄すると同時に、専ら儒教との習合を目標とし、それに五行讖緯説・陰陽道等の諸説を加味して、その發足を新たにした。もとより、その骨子となる處は神

道五部書であつて、それに宋學性理の説を以つて説述したのである。當代にあつて神道説を唱道した人人の中に復古神道と佛家神道とを除く以外の人人は、多く朱子學と結んで、所謂儒家神道風の傾向を帯びてゐるが、これは當時の幕府の儒學を奨勵した一の所産とも見られるのである。

垂加流の神道は山崎闇齋によつて始められたものであるが、闇齋はもと妙心寺に入つて禪僧の修業をなし、その朱子學を學ぶに至つて、還俗して専ら朱子學に専念したのである。彼れの神道に手を染めたのは伊勢神道であつたが、更に吉川惟足から唯一神道の傳を受けて、ここに独自の神道觀を樹立して、垂加神道なるものを創始したのである。されば彼れの神道は朱子學にその根基を置き、それに伊勢神道と唯一神道とを加味して大成したのである。かかる觀點よりするならば、彼れの神道説は一種の儒家神道であつたといふべきであらう。尙ほ彼れの流名を垂加と稱したのは、神道五部書の一である『寶基本紀』に「神垂以三祈禱爲先、冥加以三正直爲本」といふ處に、その根基を置いてゐるのである。されば彼れは伊勢の神宮、三種

神器等の解説に重きを置き、その他五行中の土金を重視して、これを以つて人間一切の行動を指導しようとしたのである。

ここに新たな神道説の一として、土御門神道なるものが生れた。これは陰陽道家職を持つ土御門泰福の唱道した神道説であるが、元來が天文道を學んだ家系の人であつたので、その説く所は儒家神道に類似の點が多かつた。殊に泰福が山崎闇齋の門に入つた關係上その主張は垂加神道を骨子としたやうである。

次に伯家神道は神祇伯として宮中及び神祇官の神事その他を掌る最高の家職を以つてゐた白川家の資顯王の手になつたものである。戰國時代に吉田兼俱が唯一神道を唱へて、宗教神道的な教義を樹立し、殊に神祇長上たるの名稱を以つて全國の神社に臨み、多數の神職をその麾下に集めたので、白川家の人人は心穩かでなかつた。然るに江戸期に入るも、吉田神道は衰へず、愈々隆昌を極めたので、ここに資顯王は所謂伯家神道を興して、これと相對應することに勉めた。去りながら、白川家はその家職として、神道説などに關することは避けてゐた爲め、新たに組立てら

れた神道説は、到底吉田神道のそれには及ばなかつたのはいふまでもない。彼れ等は天之御中主尊と國常立尊とを中心として説いたのである。

以上は大體に於いて戰國時代頃までに起つた神職側の樹立した神道説を祖述したか、或はそれに中心を置いて新しい説を立てた人人の手になつた神道説であるが、その他に儒者によつてなされたものが、當代にあつては相當多かつたのである。山崎闇齋の垂加神道も、當然その範疇に加へられるが、その他江戸幕府の官學の首腦者である林羅山を中心とした新進の漢學者の人人によつて唱へられた神道説が、漢學を根柢として、従前のそれとは異つた旗幟を掲げたのである。これ等の人人の中には、徳川義直・淺見綱齋・若林強齋などがある。これ等の人人は前述の如き一の神道説を樹立したといふ程でもないが、彼れ等の説く處は、當代にあつては相當重要視されてゐたと見なければならぬのであらう。その他水戸に於いては、徳川光圀を中心とする朱子學派の人人が、それに呼應して儒家神道を唱道して久しく持續され、所謂水戸學派として明治維新にまで及んだのである。

當代に於いても佛家の唱へた神道説は度外視することの出来ない一つの表れであらう。それ等の神道説の中には、前代既に完成されたものが存するが、これ等は時代の降下と共に、その主唱に多少の變化を見せてゐると思はれる節も存する。又新たに樹立したのも少くなかつた。中にも三輪御流神道の如きは、前述の三輪大明神縁起を根據としたそれである。その他兩部神道・山王一實神道・法華神道などは、皆前代よりの神道説の繼續であるが、その他に雲傳神道（眞言密教に基盤を置くもので、兩部神道の流れを汲むもの）なども存したのである。

扱以上の諸神道説の行はれてゐる際、古學の復興に伴うて主唱された神道説が存する。これを俗に復古神道と唱へてゐる。これ等の一派はその源流を専ら『記』『紀』に置くもので、それに古語拾遺・延喜式・新撰姓氏錄・萬葉集等の所謂古典に典據を求めて、我が建國以來の神道觀を明かにし、佛教・道教・儒教等外來の宗教・思想を來得る限り排除して、純正なる我が古代の思想と傳統とを把握せんと努めたのである。その先驅となつた人は荷田東齋で、その後を受けた人に賀茂眞淵・本居宣長・

平田篤胤の三氏が存する。以上の人人を俗に國學の四大人と稱する。彼れ等の説く處は専ら國體を明徴ならしめようと勉めたので、その間自ら神道にも觸れたのであるが、結極それが一の神道説を形造ることとなつたのである。彼れ等の説く處は共に外來思想の排撃に在つた爲め、自然その間國家偏重主義に傾く嫌がないでもないのである。殊に宣長・篤胤等は神道と國家との結び付きに心を致したかに思はれる。それが所謂國家神道の因をなしてゐると見られてゐるのであらう。

これ等復古學派の人人の續出によつて、從來の神佛習合、神儒習合等の諸説に一應終止符を施したやうであるが、しかもそれ等の諸神道は、復古神道と共に明治維新まで、兎も角繼續されてたのである。然るに明治維新はこれ等の諸神道説を一掃した形を取つたのであるが、當時平田派の神道説と儒家神道説とが時の政府に採用された。尤もその間、伊勢の神宮を中心とする伊勢派、出雲大社を中心とする出雲派の神道説も存したが、中にも平田派は最初に中央を離れ、亞いで出雲派、伊勢派等も脱落して、遂に水戸派が最後まで踏み止つたのである。

上述の他に個人としての神道説も見べきものが存するが、ここには省略する。只だその間にあつて石田梅巖が神儒佛三教を混淆して樹立した心學が生れたが、これは宗教的な色彩よりも、寧ろ道徳的なそれが多かつたかに思はれるのである。去りながら、廣義の意味に於ける神道説ともいひ得るので、ここに注意を喚起する次第である。尙ほ復古派の本居宣長の説を反駁した人に橘守部がある。又大國隆正の唱道した神道説も注目に價するものであらう。

要するに、我が神道説は最初佛家の手になつて、神職側に刺戟を與へたので、遂に神職側の神道説が勃興し、續いて儒家のそれが起り、最後に復古學派の諸説によつて、以上の諸説は一應精算されて、明治維新に及んだのであるが、この間、佛家の神道説は宗教的にこれを理論付けると共に、實際の布教にもそれを利用したのである。尙ほその他にあつては、吉田神道が宗教的神道説として發展し、實際的方面に用ひられたのである。尤もその他の神道説も、多少は神道の宣布に利用されたがそれは極めて微微たるものであつたと見なければなるまい。只だ明治維新以後に於

いて、各地に残されたものとしては、その實際行事の中に佛家の神道説と吉田神道と平田神道とがあつたことは注意すべきであらう。

著者略歴

京都市上賀茂、鎮座賀茂別雷神社の社家の家に生る。大正三年京大文科出身、賀茂別雷神社禰宜を経て昭和元年内務省神社局に入り、考證官を拜命、昭和八年鎌倉宮司に任ぜられ、同十二年鶴岡八幡宮宮司に轉じ、同二十一年には神社本廳教化部長を兼ね、現今に及ぶ。其の間、専ら神道の研究に勉め、昨廿二年宗教思想研究所を開設して、神佛基其の他の思想研究を目的として、鋭意これを完成に努力してゐる。

著書  
神社の宗教性（神社新報社刊）



昭和二十三年十二月二十日 印刷  
昭和二十三年十二月三十日 發行

定價 百二十圓

著者 座田 司 氏

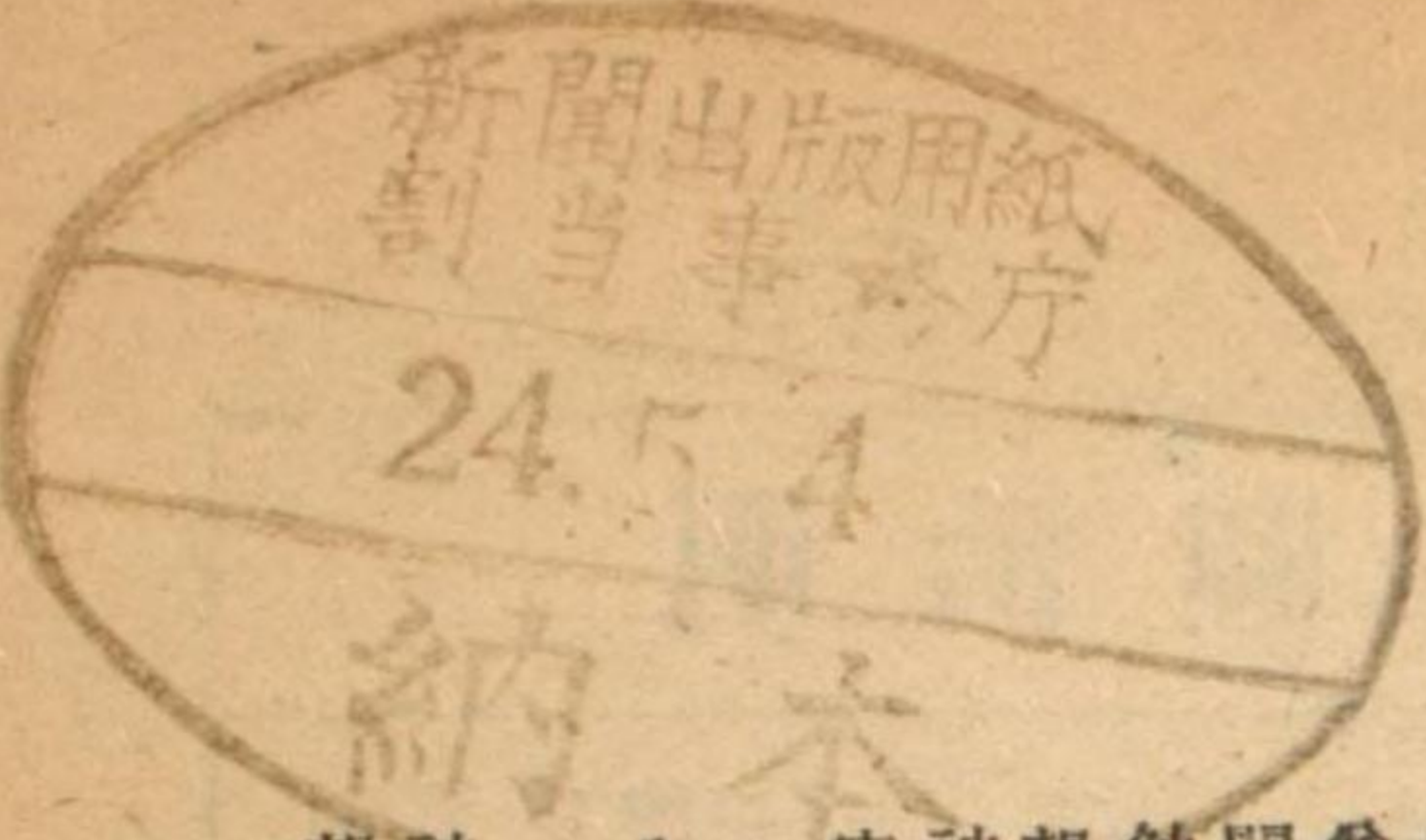
發行者 東京都中央區入舟町三ノ五  
藤原 政 雄

印刷者 研 文 社  
代表者 中川 二郎

發行所 東京都中央區入舟町三ノ五  
明治圖書出版社

電話築地(55)〇八六七番  
振替東京一八五一三番

170  
25



# 明治圖書の新刊

宗教思想研究所員 岸本芳雄 著 **日本倫理學史概説** 定價 6判 二百五十圓 送料 二十圓

上代より近世に互る神儒佛三教を中心とした日本倫理思想展開の歴史を概観し、その大綱を明示した

權威書。

一、上代倫理思想 1、外教の傳來 儒教、佛教 3、宋學の傳來 折衷學派及び考證學派

2、外教の改新 2、近世倫理思想 1、諸學興隆の機運 獨立學派

3、外教の隆盛 2、儒教と倫理思想 3、佛敎と倫理思想 4、心學と倫理思想

二、中世倫理思想 1、朱子學派 5、神道と倫理思想 國家神道、伊勢神道

2、新佛敎の勃興 陽明學派 垂加神道

2、神道説の成立 古學派

★文學博士 稻富榮次郎 著 **晩近の教育哲學** 定價 6判 二百四十圓

科學的敎育學—批判的敎育學—實證的敎育學—辨證的敎育學……プラダグマチズムの立場迄の敎

育哲學の潮流を解明した名著。

★東京高等師範學校教授、東京文理科大學講師 山極眞衛 著 **新敎授形態論** 定價 6判 二百七十圓

「新敎育の敎授原理」の姉妹篇。學習指導の形式を詳細に論述した敎授方法等の金字塔。

★文部 永田義夫・宮山平八郎 共著 **新科學敎育の課題** 定價 6判 二百一十圓

事務官 木場一夫・馬場重德 共著 **新科學敎育の課題** 定價 6判 二百一十圓

一、理科敎育のカリキュラム 三、アメリカの科學敎育 四、自然研究と路傍圖書館

二、科學敎育と研究 一、主としてその目標の問題について 五、路傍博物館について

★廣島文理科 栗田元治 著 **解説 日本文化史** A 5判 四百〇〇圓

★大學前敎授 栗田元治 著 **解説 日本文化史** 定價 五百圓 送料 二十圓

正しき歴史的事實に基いて日本文化の潮流を解明した名著。

